

「おじいさんと私」

高松市立屋島東小学校 6年 木村 寧々

夏休みに入ったある日、私はお母さんに、「人権問題とは何か。」と聞かれました。私は、しばらく考えたけれど、答えられませんでした。ふり返ってみると、絆月間や人権集会はあったけれど、人権を自分のこととして、深く考えるような機会はなかった気がします。

そこで、人権問題について調べてみると、友だち同士のいじめ、大人による子どもへの虐待、高齢者や障がい者に対する差別など、さまざまな人権問題があることを知りました。でも、私の周りの大人はみんな優しいし、小学校の友だちは仲が良いし、おばあちゃんは元気だし、障がいや病気で困っている知り合いもいません。人権問題って一体何だろうと、私は分からなくなりました。

そんなある日、私はおばあちゃんと電車に乗って、仏生山のお墓参りに出かけました。仏生山駅に着くと、お墓のある法然寺まで歩きました。その日は、とっても暑かったので、私もおばあちゃんも、くたくたになりました。帰りの電車に乗ると、ほかのお客さんも暑さで疲れていたのか、みんな座っていました。私も疲れていたのか、おばあちゃんと一緒に座りました。電車が動き出すころには、席はいっぱいになりました。疲れたなと思いながら、外の景色をながめていると、次の駅でショッピングカーのような物を、引きずりながら、電車に乗ってきたおじいさんがいました。おじいさんは鼻にチューブのような物を入れて、とても辛そうに見えました。そこで、私は「席をゆずりたいな。」と思いました。けれど、みんなに見られるのが恥ずかしいので、知らないふりをしてしまいました。周りを見てみると、スマートフォンを見ている人、友だち同士で話している人、寝ている人、誰もそのおじいさんを見ず、「人権問題ってこれではないかな。」と思いました。おじいさんを無視している、そんな周りの人たちの差別する心の冷たさに、私は、がまん出来なくなって、急いでおじいさんの方へ行行って声をかけました。

「こっちに席ありますから、どうぞ。」

おじいさんは、おどろいたような顔をしましたがすぐに笑って、

「ありがとう。」

と言ってくれました。そして、おじいさんは電車を降りるときも、お礼を言いながら、私の頭を大きな手でなでてくれました。おじいさんの笑顔が嬉しくて、私も笑顔になりました。家に帰って、その話をお母さんにしたら笑顔で喜んでくれました。ただ席をゆずっただけなのに、私の周りの人がみんな笑顔になったことが、不思議でした。

私は、人権問題についてまだ分かりません。でも、一つ分かった事は、困っている人がいたら、進んで声をかけるということです。「私だけではなく、みんなの力で笑顔があふれる世界になってほしい。」と思います。